

## メルヴィルの『ピエール』(2) ——「真理の道化」対「有徳の便宜主義」——

五十嵐 博

### Melville's *Pierre* (2) ——“A Fool of Truth” vs. “A Virtuous Expediency”——

Hiroshi IGARASHI

#### Abstract

The main theme of *Pierre* is a conflict and dispute between Pierre as “the fool of Truth” and Christendom that acts and moves with “expediency.” Pierre is the personification of Melville’s undeviating spirit of pursuing the truth, whereas Rev. Falsgrave exemplifies “a virtuous expediency” the pamphlet entitled “*EI*,” which means “If” in Greek, holds up and Pierre’s cousin Glen represents “expediency” or opportunism in its worst sense. The conclusion of *Pierre* contradicts that of “*EI*,” but they are as it were two sides of the same coin in that “*EI*,” inserted in the middle of the book, propounds “a virtuous expediency” as “a practical virtue,” while Pierre is, from the beginning of the story, set against the idea of “expediency,” denouncing it as “all the convenient lies and duty-subterfuges of the diving and ducking moralities of this earth,” and ends up symbolically shooting to death Glen, who is a vicious embodiment of “expediency” and a sort of Melville’s worldly alter ego, and ultimately committing symbolic suicide which implies the death of his innocent soul.

#### 5. テーマ——「真理の道化」対「有徳の便宜主義」

メルヴィルの作品群を竜骨のように貫くテーマは、「真実の語り手」(MD 47)<sup>1)</sup>たるメルヴィルが処女作『タイピー』執筆以来、終始一貫して彼の作品中に発現してきた真実追求精神と、人間世界、とりわけ彼の生きるキリスト教人間世界の実態との軋轢と衝突にある。この真実対現実のテーマは『ピエール』では、ピエール対世間の対立と衝突を通して、具体的には、「真理の道化、美徳の道化」(P 358)<sup>2)</sup>の姿態化たるピエールと、パンフレット“*EI*”が説く「有徳の便宜主義 (a virtuous expediency)」(P 214)、すなわち「実行可能な美徳 (a practicable virtue)」(P 215)たるご都合主義を体現し実践する牧師フォールスグレイヴとの対峙、およびその「便宜主義」を最悪のかたちで発揮するいとこグレンとの激突を通して描出される。そしてこの作品における真実対現実のテーマを解明するための糸口は“fool”と“if”というキーワードにある。

#### 5.1 fool

作者は物語の6つの局面で主人公ピエールを“fool”と呼んでおり、この呼称がピエールという人物とその生きざまを如実に言い表している。1回目は、イザベルが手紙でピエールに、世間は彼を“fool”呼ばわりするだろうけれど、天使のような存在となって彼女を救いに来てほしいと訴える局面である。

親愛なるピエール…あなたは天使のような人なのではないか？世間の心ない慣習や流儀を跳び越えられる天使のような人でしょうか？もしあなたが天上的衝動に負けて、長い間私を苦しめ続け、今はもう抑え切れなくなり張り裂けそうになっている私の憧憬する心に呼応してくださるなら、世間はあなたを“fool, fool, fool!”と呼んで罵るでしょうけど。(P64)

この文面はその後のピエールの行動を予示している。ピエールは、慈善裁縫会でイザベルを一目見た時点で彼女に性的に魅かれており、男性としての本能的情動を意識下に

潜ませながら、意識的には正義と美徳を行使するために彼の世間的幸福のすべてを棄てて彼女を救おうと決心し、ある意味でいわば天使のような行動をとる。

世間の誰も彼を直接“fool”呼ばわりすることはないが、ピエール自身の内なる声が、つまり彼の世間的視点が彼自身を“fool”とあざ笑う。作者がピエールを“fool”と呼ぶ2回目と3回目の局面では、いずれもピエール自身の内なる世間的視点からの声を代弁する語り手が彼を“fool”と呼んであざ笑い、罵る。2回目は、イザベルの存在を母には隠したままで彼女を世間に認知させ、父の名誉を汚すことなくイザベルとの姉弟関係を公にするという、矛盾し並立不可能な4つの目的と意図の狭間で苦悶するピエールに対してピエール自身の心の内の声が「おお!“fool”よ、盲の“fool”よ、百万倍ものトンマめ!…高邁な行為はおまえのような盲の地虫のためにあるのではない!」(P 171)と叫ぶ。3回目は、自己の社会的幸福を犠牲にしてイザベルと偽装結婚することにより矛盾し合う4つの目的を何とか和解させたピエールに対して、都会へ向かう沈黙の馬車内で「悪魔が、彼の自己放棄的求道精神は月光のような虚構にすぎないかもしれないとささやき、彼をあざけて“fool”と呼んだ」(P 205)のであり、ここでも世間が直接口を開いてではなく、ピエール自身の内にある世間的なものの見方が彼を“fool”と認識している。

4回目は、楽園のような田舎で生まれ育ったイノセントな青年ピエールが新進作家としてそれまでに書きためておいた下書原稿が価値のない代物であることを悟って「1万もの新しい開示がぼくの額に“fool”という烙印を押す」(P 273)と、冷たい都会にやって来て3日目の晩にイザベルに言う局面である。そして5回目は、元使徒教会の塔の中の部屋からピエールの部屋の窓を見つめるプリンリモンの顔が「むだ!むだ!むだだ!…愚か者!愚か者!愚か者め!…やめろ!やめろ!やめろ!…とんま!とんま!とんまめが!(Vain! vain! vain!.. Fool! fool! fool!.. Quit! quit! quit!.. Ass! ass! ass!)」(P 293)と言っているように思える局面、すなわち、ピエールが世間の基準で自らと自らの行動を客観視する局面である。

最後は、作品最終書で、グレンらと対決しに外へ出るため、自室から廊下に出て、イザベルの部屋のドアとルーシイの部屋のドアとの間で、まるで磔刑に処せられたキリストでもあるかのように両腕を広げた十字のポーズをとって「真理の道化、美徳の道化、運命の道化は今、永久にきみらのもとを去る!」(P 358)と宣する局面である。ピエールはパンフレット“EI”で比喩として語られる「天上的な」クロノメーターになろうとして、つまり、現実的な美徳を身につけた地上の人間ではなくて「天使」になろうとして、最終的には自ら自分自身を「真理の道化、美徳の道化、運命の道化 (the fool of Truth, the fool of Virtue, the fool of Fate)」と呼んで破滅に向かい、グレンを射殺して自らも命を断つ。このエンディングは、純真なピエール、

換言すれば、作者の中の良心的な真実追求精神はこの人間世界と人生において“fool”のような役回りを演じたという作者の認識を示していると考えられる。

## 5.2 “EI” —— If

「真理の道化」であるピエールがエンケラドスのようになって戦いを挑む「断崖の…壁」(P 346)が、パンフレット“EI”(ギリシャ語で“If”)の説く「便宜主義」である。メルヴィルはパンフレットに“EI”というタイトルを付し、かつ、その論述を“if——”で終えているが、彼はifをどのような意味合いで使っているのか?

この疑問に対する答を私たちは『信用詐欺師』中の守銭奴と詐欺師との間のやりとりの中に見出すことができる。詐欺師を信用して彼に大金を預けるべきかどうかと逡巡する守銭奴が「もしも、もしも今、わしが預けたら、預けたら——」と言うと、詐欺師は「もしも、もしもはお断りだ。全面的に信用するか、否かだ…半信は受け付けない」(CM 75)<sup>3)</sup>と応じて、結局、守銭奴から札束をまきあげることに成功するが、ifは「半信 (half-confidences)」と端的に定義されている。メルヴィルが『ピエール』で使用しているifは、事実に反したり、実現可能性なしの不可能な仮定を意味するものではなく、詐欺師の定義する「半信」としてのif、つまり可能性半分の想定を意味するifである。

『モービー・ディック』でもIfは発せられていたが、これも同様である。エイハブの独白を通してメルヴィルは、人間の進歩の過程を「幼児期という無意識の期間、少年期の思考することなき信念、青年期の疑念(万人共通の宿命)、そして懐疑、さらに不信を経て、最後に成年男子の“もしも”という沈思に落ち着く」(MD 492)と語っているが、このIfも、文脈から判断して可能性半分の想定を表すものと解釈できる。したがって、“EI”は成年男子のIfであり、可能性半分の想定を意味するものと結論付けることができよう。

では、なぜメルヴィルはパンフレットにIfではなく、“EI”という謎めかしたタイトルを付けたのか?“EI”にはギリシャ語のIfという意味の他に、EI(エル)、つまり神という意味が隠されているのではないかと推量する研究者もいる。<sup>4)</sup>しかし、もし、そのような推量が可能だとすれば、つまり、“EI”をEI(エル)の誤植のようなものとしてとらえ、それはメルヴィルの諸作品中の登場人物たちIshmael, ElijahやIsraelのel(エル)、妻ElizabethのEI(エル)、“Eli, Eli, lama sabachthani?(わが神、わが神、なぜ我を捨て給いしや?)”(Mt. 27:46)のEI(エル)であり、神を意味すると解釈することができるのであれば、その解釈に加えて、さらに、“EI”はドイツ語発音では“アイ”で「卵」を意味し、しかもその発音は英語の「私(I)」または「目(eye)」を意味するという語呂合わせ的解釈も可能になるであろう。実際、作者はそうした語呂合

わせ、ないし駄洒落を認識していたと考えられる。なぜなら作者は*i*を*eye*ととらえて、作家ピエールの原稿の「*i* (目)の上の点(涙)」(a dot (tear), over an *i* (eye) —P 263)に「涙(The Tear)」というタイトルを与えているからである。しかし、“*EI*”にそうした語呂合わせので多義的な解釈が可能だとして、そのような解釈に一体どれほどの意味があるのだろうか？

Ifという意味以外の解釈は、『マーディ』で哲学者ババランジャが語る寓話に登場する「多義(polysensuum)」(M 357)<sup>5)</sup>のメタファーとしてのベンガルボダイジュの枝のようなものではなかろうか？「無知なほどよい」(M 355)と言ってババランジャが語る寓話では、千本の枝が地中に突き刺さって本来の幹がどれか分からなくなっているベンガルボダイジュの巨木を9人の盲人が取り囲み、それぞれが最初に触れた枝を本来の唯一の幹だと主張する。つまり、各人がそれぞれの錯誤を唯一の真実だと主張するのであるが、“*EI*”というタイトルは、いわばこのベンガルボダイジュのようなもので、その本来の幹はIfという意味に相違ないであろう。もしそうでなければ、このタイトルと“if——”で終わるパンフレットの内容との整合性がなくなる。『ピエール』には、ピエール自身を指して「ジャグラー(juggler)」という語が複数回使用されているが、作者メルヴィル自身がジャグラーであり、パンフレットにストレートにIfではなく、わざわざギリシャ語で“*EI*”というタイトルを付けて、その意味として卵、私、目、神などの多義的で曖昧な解釈を可能にしているのは作者のジャグリングであり、目くらましであろう。

“*EI*”の本質的意味は、パンフレットの内容に照らし合わせてみて、あくまでIfである。メルヴィルは、パンフレット本文に「海のクロノメーター(ギリシャ語で、時の命名者)」(sea-chronometers (Greek, time-namers) —P 211)と書いて、その語源説明を“*EI*”がギリシャ語であることの読者向けのヒントとしているようである。ただ、ギリシャ語源の*chrono-*, *time* + ギリシャ語源の*-meter*, a measureを、メルヴィルもしくは当時の言語学者は、ギリシャ語源の*chron-*, *time* + ラテン語源の*nominater*と誤解していたようではあるが。

では、なぜIfなのか？なぜ“if——”でパンフレットの論述を終了させているのか？なぜなら、メルヴィルはIfをケース・バイ・ケースの想定に基づいて行動する「便宜主義」、ご都合主義を象徴する語としてとらえていたからであろう。そして、どっちつかずの姿勢を表すIfは、『曖昧なるもの』というこの作品の副題の主調にも合致する。Ifはパンフレットおよびこの作品の心臓部、本質部分を解明するためのキーワードであると同時に、「真理の道化」対「有徳の便宜主義」というテーマの半分を担っている語である。

### 5.3 “*EI*”の結論 vs. 『ピエール』の結論

語り手は、パンフレット“*EI*”の内容は「問題それ自体の解決というより、見事な例証によって問題を説明し直したもの」(P 210)であると言う。このパンフレットは、ピエールが直面している問題であると同時にこの作品の中心テーマでもある真実対現実の問題を、別の喩えを使って、つまり「経度測定用精密時計クロノメーターのようなもの(Chronometricals)」なる天上的精神と「普通の時計ホロロジのようなもの(Horologicals)」である地上的精神の対比によって例証している。したがって、「問題を説明し直したもの」であるこのパンフレットの趣旨を理解すれば、この作品で作者が言おうとしたことも理解できることになる。では、メルヴィルはこのパンフレットとこの作品で一体何を言おうとしたのか？

メルヴィルがこのパンフレットで言おうとしたことと、この作品全体で言おうとしたこととは同じではない。同じではないが、しかし、表裏一体の関係にある。なぜなら、パンフレットの趣旨と結論は、現実に即した「実行可能な美德」としての「有徳の便宜主義」のすすめであるが、この作品全体の結論はパンフレットが説く現実対応の「便宜主義」の否定であり、パンフレットの結論があつて初めて、それを否定するという作品全体の結論が成立するからである。パンフレットの言う「便宜主義」を体現し実践している人物は、登場順に並べると、牧師フォールスグレイヴ、パンフレットの著者プリンリモン、および、ピエールのいとこグレンであり、この「便宜主義」を否定する主人公ピエールは、タジ、エイハブと軌を一にする真実追求精神の顕現であり、その精神は「便宜主義」の対極にある。

### 5.4 “*EI*”の人生哲学

では、パンフレットの登場から、その「便宜主義」という結論の提示に至るまでの過程で述べられていることを以下に整理してみよう。

まず、パンフレット“*EI*”がいかに重要な意味をはらむものであるかを作者は「沈黙」というキーワードによって暗示する。すでに見たように、<sup>6)</sup> 作者は「沈黙」を重大な出来事や事象の発生を示す信号ないし標識として使用しながら作品を書き進めたと考えられるが、パンフレット“*EI*”が登場する第14書をメルヴィルは「すべての深遠な物事と情動は沈黙に先導され、沈黙に伴われる」(P 204)という意味深で重々しい1文で書き始める。続けて彼は、都会へ向けて沈黙の野と森を駆け抜ける馬車の沈黙した車内でピエールに、自分の行為は「正しいのか間違っているのか(right or wrong)」(P 205)と、親にも牧師にも世間にも背いて「最後の罪(the last sin)」(P 206)に向かって進行しているように思える自分の行動は正しいのかと思念させる。

「最後の罪」とは何か？これは『マーディ』の結末でマーディ群島を飛び出るタジが犯そうとする「究極の犯罪

(the last crime)」(M 654)と同じ自殺行為を指すと思われる。しかも、その自殺とは身体的自殺ではなくて、ババランジャが言うところの「魂の自殺者」(M 426)になることを意味すると考えられる。なぜなら、パンフレットは「[[天上の魂をもつ人間は] この世の実際的な事柄に関しては、一種の自殺を犯さない限り、その同じ天上の魂を抱えたままでは自分の地上での行為を律することは望めない」<sup>7)</sup>(P 213)と語っているからである。つまり「最後の罪」とは、自分の内にある天上の魂を自ら殺すことを意味する。ババランジャは「魂を殺すよりは身体を殺したほうがよい。もし自らの身体を殺人者になることが最も恐ろしい罪だとしたら、魂の自殺者となるのは、どれほど恐ろしい罪であろうか」(M 426)と言って、魂の自殺を身体的自殺以上の大罪として認識していた。作者メルヴィルの真理探究魂の顕現であるピエールは、登場人物としては殺人を犯した後、牢獄内で服毒自殺をするが、その虚構の身体的自殺行為は作者の純真な魂の自殺を意味するものと解釈できる。牢獄内に横たわるピエールに対してミルソープが言う最後の台詞「なんという侮蔑にみちた純真さがその唇に宿っているのか、わが友よ！」(P 362)は、メルヴィルがメルヴィル自身に対して、メルヴィルの中のイノセントなピエールに対して言っている言葉であろう。

馬車内のイザベルとデリイは眠っており、ピエールは沈黙の中で思念する。自分の行為は「正しいのか間違っているのか」と思念するピエールが直面する問題は、自分の内なる魂の声が告げる真理とこの世の実態との乖離であり、「神に受け入れられるための大条件としてキリスト教はすべての人間にこの世を放棄せよと呼びかけているにもかかわらず、世界中で最も拝金的な欧米地域がキリスト教を信奉する国民たちによって支配されている」(P 207)という矛盾である。「善人や賢人たちは、この世界は偽りに満ちているように見えるが、実際には…偽りとともに多くの真実があると言う」(P 208)が、バイブルの視点から見ると「この世界は偽りである」(ibid.)。こう思念を進めながら、キリスト教の理念とこの世の現実とを調和させる方法を模索するピエールは、馬車の座席に置き捨てられてあったパンフレット“EI”を読む。

“EI”は「地上における人間の生は、試用期間のようなものにすぎない…我々死すべき人間は仮のものを扱うのみである。したがって我々のいわゆる知恵なるものも仮のものにすぎない」(P 211)という前置きで始まり、最後は“if——”という仮定への導入表現で途切れている。そして本文では、仮の世と生に対する仮の対応である「便宜主義」を結論として提唱するが、結論に至るプロセスで、時計の比喩を使いながら、天上的な知恵と地上的な知恵との差異について説明している。時計の比喩は『モービー・ディック』でも見られ、信仰心の深いスターバックが「極地の雪の中であらうと灼熱の太陽の下であらうと、彼の内なる活力は、特許クロノメーターのように、どんな気候でも正

常に機能すると保証されていた」(MD 115)と、クロノメーターに喩えられていた。“EI”ではこの比喩が発展拡大されて、キリストの天上の知恵がクロノメーターに喩えられ、それに対して現世の人間の地上の知恵はホロロジに、そしてもっと具体的にはチャイナの現地時計に喩えられている。

そして“EI”は次のように論を進める——「天の真理」(P 211)を伝えるある種の人間、キリストのような人間の魂は、ロンドン発のクロノメーターのようなものである。しかし、この世の人間の魂は、神と天の真理から乖離している。したがって、クロノメーターのような魂による天上の基準に従った正邪の判断は、この世の基準による正邪の判断に反する。キリストはクロノメーターだが、彼の知恵は愚なるものである。なぜなら彼が残したクロノメーターは天の時を刻み続け、この世界はこの世界の時間を保ち続けたからだ。例えば、チャイナの計時器、つまりチャイナの基準はチャイナでは何ら問題ないのであって、チャイナまで運ばれたクロノメーターが表示するグリニッジの時間、つまりグリニッジの基準はチャイナでは誤りとなる。この喩えから分かるように地上の人間の知恵は天の神にとっては愚かなるものであるが、逆に、天の神の知恵は地上の人間にとって愚かなものとなるのである。チャイナで計時器がロンドンのグリニッジの時間を表示していたら、その時間は間違いとなる。クロノメーターの魂をもつ者が天の時間を地上に無理強いしても成功はしないし、地上の時間を遵守する人々を敵にまわして、自分自身に悲しみと死を招くことになろう。このことは、キリストとその宗教が辿った道を見れば、はっきりと分かる。クロノメーターの教えを実践することは、天上では可能だが地上では不可能であり、したがってその教えは地上では虚偽である。

その証左として“EI”は「右の頬を打たれたら左の頬を差し出す」という思想に言及する。メルヴィルはこの思想に『ホワイト・ジャケット』でも触れていて、「私たちが信じる彼は、右の頬を打たれたら左の頬を向けよと言っている…その1節こそはキリスト教信仰の精髓と本質を具現しており、この精神がなかったら、キリスト教は他の信仰と変わらない」(WJ 320)<sup>8)</sup>と語っていたが、“EI”では「右の頬を打たれたら左の頬を差し出すというのはクロノメーター的考えであり、普通の人間でそんなことをした者はいない」(P 213)と言う。ピエールはグレンに鞭で片方の頬を打たれて、もう片方の頬を差し出したか？ピエールはグレンの悪行に対して善行を返したか？否。ピエールはキリスト教の精髓を形成している精神を実践できない、というか実践しないのである。ピエールは、父の名誉を守りつづいザベルを救済するために、許婚を犠牲にし、家督を含めた自らの社会的幸福を放棄してクロノメーターになろうとしたが、彼は本能的、本質的にクロノメーターたりえなく、普通の人間の1人、ホロロジであらざるをえないのである。

“EI”はさらに、これまでのキリスト教世界の歴史に言

及し、キリスト教世界は、キリスト教発生以前の世界と変わらずに血と悪に満ちているという認識を語る。「キリスト教界の1800年の歴史は、キリストの教えにもかかわらず、それ以前の世界の歴史と同様に、血と暴力と不正に満ちている」(P 215)と、キリスト教世界に対するこれと同種の批判的認識は『マーディ』でババランジャの口を通してすでに語られており、ババランジャはアルマ(=キリスト)降臨後の世界でアルマ教徒(=キリスト教徒)たちが行ってきた悪行を次のように批判していた——「預言者は、私たちマーディ人をもっと徳高く幸福にするために来た。だが、アルマ以前にあった善とともに、アルマの時代にあったものと同じ戦争、犯罪、悲惨な状況が形を少し変えて今も存在する。いや、モヒよ、お前の年代記から、名ばかりのアルマ信徒たちの行為がもたらした数々の恐怖の歴史を除外してみよ。そうすればお前の年代記にそう頻繁には血生臭い話は出てこないだろう」(M 349)と、メルヴィルのキリスト教界に対する批判ないし糾弾は、白人キリスト教文明に侵食されたポリネシアを舞台とする最初の2作『タイピー』と『オムー』の当初から首尾一貫して文言化されており、『モービー・ディック』で白い鯨に姿を変えて顕現した白人キリスト教文明との戦いで象徴的に描出されたが、『ピエール』では牧師フォールスグレイヴの言動描写、および“*EI*”の記述を通して表明される。

“*EI*”で展開されるキリストの知恵と地上の知恵の対比も『ホワイト・ジャケット』ですでに考察され、両者の知恵の間に一線が引かれていた——「至福千年の到来を期待して、私たちが異教徒にせつせと教えている格言を私たちキリスト教徒自身が無視している。私たちの世界の現社会体制がキリスト教の柔和さを実行するのにふさわしくないことを考えると…聖なる救い主は天上の知恵に満ちてはいたが、彼がもたらした福音は地上の実用的知恵を欠いていると思える」(WJ 324)と。“*EI*”は、したがって、人間は地上の人間界ではできるだけ正直で最善であろうとすればよいのであって、多少の罪さえも犯さないようにすることは「天使に、つまりクロノメーターになろうとすること」(P 214)であるが、これは、ホロロジ、つまり普通の計時器である人間にとっては不可能なことでありと論ずる。「完全な善になる」(P 215)という不可能なことを目指さずに「実行可能な美德」を身につけるべきだ、というのが“*EI*”の趣旨であり、「有徳の便宜主義というものが、したがって、人間にとっては最も望ましい、また到達可能な地上最高の美德であろう」(P 214)と結論付け、「実行可能な美德を提唱する」(P 215)と締め括っている。

パンフレットは内容的に、この作品の道徳的側面を時計の比喩を使用して例示していると言えるし、また逆に、この作品はこのパンフレットの趣旨をピエールを中心とする登場人物たちの言動によって例証しているとも言える。しかも、パンフレットとこの作品の密接な関係はパンフレットの最終的な物理的所在によっても暗示されている。なぜ

ならピエールは知らぬ間にパンフレットを「身につけていた」からである。その経緯は以下の通りである——まず、馬車の座席に置き捨てられてあったパンフレットは「魚の干物のような、パンフレットらしきぼろ紙切れ」(P 207)と描出されるほどに卑しい感じのものに見えるが、それを偶然、手にしたピエールは繰り返し読んでみても、書き手の考えをよく理解できないと思う。そして、その内容は「きわめて単純明快なことであり…しかし同時に非常に深遠でもあり…また、あまりにくだらないこと」(P 210)に思えた。後日、著者のプリンリモンとすれ違った後でピエールはパンフレットを探すが見当たらない。パンフレットを再び入手しようと試みるがもはや不可能で、「パンフレットをなくすとは…しかも、手にして読んで理解できなかったなんて、おれはなんとというばかだ！もう遅すぎる！」(P 293)とピエールは思うが、実はパンフレットは彼のコートポケット内の裂け目から服地と裏地の間に入ってコートの裾部分に詰め物のように納まっていたことに彼は気づかなかった。つまり、彼は物理的に「パンフレットを身につけていた」(P 294)のであり、そのことは、ピエールが比喩的な意味で「パンフレットを身につけていた」ことを、つまり、“*EI*”の内容を理解し実践したことを示唆している。なぜなら、語り手は「ピエールがパンフレットを理解していたことは、ある意味で、彼の生涯の最後が示すであろう」(*ibid.*)と述べているし、物語の最後で虚構の殺人を犯し、虚構の自殺をして果てるピエールは「悪徳そのものは悲しみそのもの」(P 215)というパンフレット末尾の1文の典型例となっているからである。

## 5.5 ピエール対世間

この作品は、「真理の道化」としてのピエールと「便宜主義」で動く世間との対立と葛藤がメインテーマであり、世間の代表として登場する人物が、作品前半の牧師フォールスグレイヴと後半のいとこグレンである。ピエールと牧師は倫理問題への対応の仕方という点で対立し、対峙はするが、衝突することはない。牧師に対してピエールは、牧師が「俸給をもらう立場で神のごとく自由に言動することはできない」(P 164)ことに理解と同情を示し「ぼくをあなたの敵とは思わないでいただきたい」(*ibid.*)と言い、これが牧師に対するピエールの最後の台詞となる。一方、作品後半で登場するいとこグレンは裏表のある言動をし、最終的にピエールと激突する。

### 5.5.1 牧師フォールスグレイヴ——「有徳の便宜主義」の体現者

フォールスグレイヴ牧師は作品前半に3回だけ登場するが、なぜ作者は、この牧師をトゥルーグレイヴではなくて、フォールスグレイヴ(Falsgrave)と命名したか？なぜトゥルーでなくてフォールスなのか？

彼は、パンフレット“*EI*”が提唱する「有徳の便宜主

義」の体現者であり、実践モデルである。彼の名をフォールスとしたことに作者メルヴィルの「有徳の便宜主義」なる人生哲学に対する否定的姿勢を見てとることができる。人間社会に対するメルヴィルの姿勢の根幹には『マーディ』のタジや『モービー・ディック』のエイハブ、そしてこの作品のピエールの精神姿勢が宿っており、あくまで真実を追求するその一途な精神は「有徳の便宜主義」なる処世術とは相容れないものだからである。

妻子ある男の子供を生んだデリイの件を倫理上の観点から論議している朝食の席で、その問題から派生して「父親を同じくする嫡子は非嫡子を忌避すべきでしょうか？」(P 101)というピエールの問いに対して、フォールスグレイヴ牧師は明確な返答を避け、「すべての質問に、良心に基づきイエスまたはノーと答えることはできません。倫理的問題はいずれもそれぞれの事情で意味合いが変わります…1つの普遍の原則ですべての事例をひと括りにするのは不可能なだけでなく、そうした試みは愚かなことに思えます」(P 102)と述べて、倫理問題に対する解答はケース・バイ・ケースであると応じる。その瞬間、彼のナブキンが胸から落ちて、彼が付けていた「蛇と鳩の寓意的合一が描かれているカメオのプローチ」(P 102)が現れるという状況と小道具の設定を行うことによって、メルヴィルはフォールスグレイヴ牧師が「蛇のように賢く鳩のように無害であたりさわりのない」(Mt. 10:16)対応をしていることを暗示している。続けて、この問題からさらに派生して「例えば、ほくは父を名誉に思うべきでしょうか、たとえ父が女たらしだと分かったとしても？」(P 103)とピエールが問うと、フォールスグレイヴ牧師は「それも、普遍的に適用できる明確な答というものがない倫理問題の1つです」(P 103)と返答して、イエスカノーかは場合によりけりであることを示唆するが、その瞬間、再びナブキンが落ちて蛇と鳩の模様のプローチが姿を見せる。

「蛇のように賢く鳩のように無害な」対応の仕方ではあっても、このように唯一の明確な答を出さずに、ケース・バイ・ケースで物事を処理しようとするフォールスグレイヴ牧師の「便宜主義」的姿勢に対する作者メルヴィルの批判的認識の一端を、私たち読者はピエールの母の言葉を通してうかがい知ることができる。ピエールがルーシとは別の女と結婚して家を出たという事態に直面して何もできない牧師に対して、ピエールの母は「出て行け！おまえのそのソフトで上品ぶった声なんぞ耳にしたくない！男の恥だ！出て行け！無能な役立たずめ！」(P 194)と毒づくからである。

作者は、フォールスグレイヴ牧師がパンフレット“EI”の提唱する「有徳の便宜主義」の体現者であり実践者であることを、フルートというキーワードによって読者に暗示している。メルヴィルはフォールスグレイヴを田舎が舞台の作品前半部に3回登場させているだけで、舞台が都会に移動する後半には1回もその姿を登場させていないが、フ

ルートの音色を通してその「有徳の便宜主義」精神を世間に奏でさせている。語り手＝メルヴィルはフォールスグレイヴの人物描写で、彼が「非常にマイルドな、フルートのような声」(P 97)をしており、「天は彼に洗練されて澄んだ音色の人格を与えた。それはこの世にフルートを吹くようで、しかも彼はそれをほぼ完璧にマスターしていた。彼の優美な所作は美しい旋律の波動を思わせた。彼を見たのではなく彼を聞いたと思うほどだった」(P 98)と語る。そして、都会に来たピエールたちが部屋を借りることになった元使徒教会には、パンフレット“EI”の著者プリンリモンと「謎のフルート教師」(P 270)が住んでおり、「静かな月明かりの夜には、彼の吹く崇高な調べが周囲の広大な倉庫群の屋根の上を流れた——かつてこの教会の鐘の音が遠い昔の世代の家々の軒に響き渡ったように」(ibid.)という情景説明を行うことによって、メルヴィルはフォールスグレイヴの言動とパンフレット“EI”が提唱する「有徳の便宜主義」とをフルートの音色によって読者に連想させ、連結させている。

### 5.5.2 いとこグレン——もう1人の自分

作品後半部開始の第15書全体がその説明に充てられているグレンは、「悲哀の都市」(P 168)における表面的に「有徳な便宜主義」の最悪の具現例として描かれている。<sup>9)</sup>なぜピエールは彼を射殺したのか？射殺することの意味は何か？

そもそも、いとこグレンとは何か？まず作者がピエールのファミリーネームであるグレンディニングを、いとこグレンディニング・スタンリーのクリスチャンネームとして使用していることに注目する必要がある。そして、ピエールが、自分より2歳ほど年上だが、家柄も体つきもよく似ているグレンを自分の「複製人間のごとく」(P 289)に認識していたと語ることによって、グレンが、いわば鏡の中のもう1人のピエール、ピエールの虚像であることを作者は暗示している。

『レッドバーン』のジャクソンがそうであったように、<sup>10)</sup>グレンも作者自身の一部である。都会育ちの同年代の青年とは異なり、田舎育ちのピエールが「物事のより暗く、より真実な側面に開眼し切っていなかった」(P 69)のに対して、グレンは都会的洗練さを身につけた人物で、フォールスグレイヴと同様に「非常に澄んだ」(P 238)声をしていて、虚偽、「偽善的ふるまい」(P 288)、そして妬みと嫉妬心のモデルのような存在として描出されている。ピエールがグレンを射殺する直近の契機は、グレンが鞭でピエールの頬を打ったからであるが、この虚構の物語内の殺人行為は、世間と軋轢を起す純真で天的な真理探究精神をもつ作者が、偽善的で虚偽的なキリスト教世界の1員として生きているもう1人の醜悪な自分を否定し抹殺する意志の寓意的表現として解釈されてしかるべきであろう。なぜなら、書くという行為は、イシューメールにとって海に出る

行為がそうであったように、作者メルヴィルにとって「ピストルと弾丸の代わり」(MD 3)であり、自分の魂の内奥を攻める行為だったからである。

メルヴィルは作品中間地点に「うすっぺらで、ほろほろになった、魚の干物みたいな」(P 206)パンフレットを登場させる以前の物語初期段階で、つまり、イザベルからの手紙を読んだピエールが「キリストのような気持」(P 106)を初めて味わいながら、彼女との第1回面談に向かう前の時点ですでに、「この地上の逃げ隠れする道德のご都合主義的な嘘や義務逃れ」(P 107)に対する嫌悪を表明し、後のパンフレットが提唱する「便宜主義」を初めから否定していた。そして、その否定姿勢はグレンの射殺に帰結する。しかも、ピエールは、弾丸とともに、彼を「うそつきめ」(P 356-7)と糾弾するグレンとフレッドの手紙の文言を切り取り、それを銃口に込めてグレンに撃ち込むが、この現象的には一見子供じみた行為にも隠された意味があり、それは、偽りに満ちた世間を「うそつきめ」と糾弾するピエール＝メルヴィルの姿勢の表明となっている。

## 註

- 1) 『モービィ・ディック』のテキストは Herman Melville, *Moby-Dick; or, The Whale*, eds. Harrison Hayford, et al., (Evanston and Chicago: Northwestern University Press and The Newberry Library, 1988) を使用し、引用には、省略されたタイトル、頁を付す。
- 2) 『ピエール』のテキストは Herman Melville, *Pierre; or, The Ambiguities*, eds. Harrison Hayford, et al., (Evanston and Chicago: Northwestern University Press and The Newberry library, 1971) を使用し、引用には、省略されたタイトル、頁を付す。
- 3) 『信用詐欺師』のテキストは Herman Melville, *The Confidence-Man: His Masquerade*, eds. Harrison Hayford, et al., (Evanston and Chicago: Northwestern University Press and The Newberry Library, 1984) を使用し、引用には、省略されたタイトル、頁を付す。
- 4) 桂田重利「メルヴィルと『ピエール』の仮面」、『神戸外大論叢第10巻第1号』[神戸市外国語大学研究所, 1959], pp. 93-105.
- 5) 『マーディ』のテキストは Herman Melville, *Mardi: and A Voyage Thither*, eds. Harrison Hayford, et al., (Evanston and Chicago: Northwestern University Press and The Newberry Library, 1970) を使用し、引用には、省略されたタイトル、頁を付す。
- 6) 拙稿「メルヴィルの『ピエール』(1) ——キーワードから読み解く「曖昧なるもの」」(『海—自然と文化』東海大学紀要海洋学部第9巻第3号, 2012).
- 7) [ ] 内の語句は筆者が補った。
- 8) 『ホワイト・ジャケット』のテキストは Herman Melville, *White-Jacket; or The World in a Man-of-War*, eds. Harrison Hayford, et al., (Evanston and Chicago: Northwestern University Press and The Newberry Library, 1970) を使用し、引用には、省略されたタイトル、頁を付す。
- 9) D. H. Lawrence について鋭敏なメルヴィル評者の1人である L. Thompson は、フォールズグレイヴを直截に「偽善的なご都合主義者」(a hypocritical time-server — Lawrance Thompson, *Melville's Quarrel with God* [Princeton, N. J. : Princeton University Press, 1952], p. 263) として認識してはいるが、残念ながら、その認識をグレンには向けえていない。田舎でのフォールズグレイヴも都市でのグレンも、両者ともご都合主義者であるが、ピエールはフォールズグレイヴに対しては、ピエール自身が彼に直接「ぼくをあなたの敵とは思わないでいただきたい」と言っているように敵対意識はない。しかし、ピエールを取り巻く状況が一変すると、手のひらを返した言動をするグレンはピエールの敵となり、「偽善的なご都合主義者」の最たる例として描かれている。
- 10) 拙稿「メルヴィルの『レッドバーン』——貧困と死」(『海—自然と文化』東海大学紀要海洋学部第7巻第2号, 2009) 参照。

## 参考文献

- Adler, Joyce Sparer. *War in Melville's Imagination*. New York and London: New York University Press, 1981.
- Arvin, Newton. *Herman Melville*. New York: The Viking Press, 1950.
- Berthoff, Warner. *The Example of Melville*. New York: The Norton Library, 1962.
- Bowen, Merlin. *The Long Encounter: Self and Experience in the Writings of Herman Melville*. Chicago: The University of Chicago Press, 1960.
- Braswell, William. *Melville's Religious Thought: An Essay in Interpretation*. New York: Octagon Books, 1973.
- Chase, Richard. *Herman Melville: A Critical Study*. New York: The Macmillan Company, 1949.
- Chase, Richard. *The American Novel and Its Tradition*. New York: Doubleday Anchor Books, 1957.
- Davis, Merrell R. and Gilman, William H., eds. *The Letters of Herman Melville*. New Haven: Yale University Press, 1960.
- Dryden, Edgar A. *Melville's Thematics of Form: The Great Art of Telling the Truth*. Baltimore: The Johns Hopkins Press, 1968.
- Feidelson, Charles, Jr. *Symbolism and American Literature*. Chicago and London: The University of Chicago Press, 1953.
- Fiedler, Leslie A. *Love and Death in the American Novel (Revised Edition)*. New York: Dell Publishing Co., Inc., 1966.
- Franklin, H. Bruce. *The Wake of the Gods: Melville's Mythology*. Stanford, CA: Stanford University Press, 1963.
- Gale, Robert L. *Plots and Characters in the Fiction and Narrative Poetry of Herman Melville*. Cambridge, Mass.: The MIT Press, 1972.
- 林信行『メルヴィル研究』東京：南雲堂, 1958.
- Howard, Leon. *Herman Melville: A Biography*. Berkeley and

- Los Angeles: University of California Press, 1967.
- 桂田重利「メルヴィルと『ピエール』の仮面」、『神戸外大論叢第10巻第1号』神戸市外国語大学研究所, 1959.
- 桂田重利『まなざしのモチーフ—近代意識と表現』東京：近代文藝社, 1984.
- Lawrence, D. H. *Studies in Classic American Literature*, Penguin Books, 1971.
- Lewis, R. W. B. *The American Adam: Innocence, Tragedy, and Tradition in the Nineteenth Century*. Chicago and London: The University of Chicago Press, 1955.
- Leyda, Jay, ed. *The Melville Log*. New York: Gordian Press, 1969.
- 牧野有通『世界を覆う白い幻影—メルヴィルとアメリカ・アイデオロジー』東京：南雲堂, 1996.
- Mason, Ronald. *The Spirit Above the Dust: A Study of Herman Melville*. Mamaroneck, N.Y.: Paul P. Appel, Publisher, 1972.
- Matthiessen, F. O. *American Renaissance: Art and Expression in the Age of Emerson and Whitman*. New York: Oxford University Press, 1941.
- Maugham, W. Somerset. *Ten Novels and Their Authors*. London: Vintage, 2001.
- Metcalf, Eleanor Melville. *Herman Melville: Cycle and Epicycle*. Westport, Conn.: Greenwood Press, Publishers, 1970.
- 大橋健三郎編『鯨とテキスト—メルヴィルの世界』東京：国書刊行会, 1983.
- Parker, Hershel, ed. *The Recognition of Herman Melville: Selected Criticism Since 1846*. The University of Michigan Press, Ann Arbor Paperbacks, 1970.
- Parker, Hershel. *Herman Melville: A Biography Volume 1, 1819-1851*. Baltimore and London: The Johns Hopkins University Press, 1996.
- Parker, Hershel. *Herman Melville: A Biography Volume 2, 1851-1891*. Baltimore and London: The Johns Hopkins University Press, 2002.
- Porte, Joel. *The Romance in America: Studies in Cooper, Poe, Hawthorne, Melville, and James*. Middletown, Conn.: Wesleyan University Press, 1969.
- Reynolds, David S. *Beneath the American Renaissance: The Subversive Imagination in the Age of Emerson and Melville*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1988.
- Rollyson, C. and Paddock, L. *Herman Melville A to Z: The Essential Reference to His Life and Work*. New York: Checkmark Books, 2001.
- 酒本雅之『砂漠の海—メルヴィルを読む』東京：研究社, 1985.
- Scribner, David, ed. *Aspects of Melville*. Pittsfield, Mass.: Berkshire County Historical Society at Arrowhead, 2001.
- 曾我部学『ハーマン・メルヴィル研究』東京：北星堂書店, 1972.
- Stern, Milton R. *The Fine Hammered Steel of Herman Melville*. Urbana, Chicago, and London: University of Illinois Press, 1968.
- 寺田建比古『神の沈黙—ハーマン・メルヴィルの本質と作品』東京：筑摩書房, 1968.
- Thompson, Lawrance. *Melville's Quarrel with God*. Princeton, N.J.: Princeton University Press, 1952.
- Wadlington, Warwick. *The Confidence Game in American Literature*. Princeton, N.J.: Princeton University Press, 1975.
- Weaver, Raymond M. *Herman Melville: Mariner and Mystic*. New York: Cooper Square Publishers, Inc., 1968.
- Wright, Nathalia. *Melville's Use of the Bible*. Durham, N.C.: Duke University Press, 1949.

要 約

『ピエール』のメインテーマは、「真理の道化」としてのピエールと「便宜主義」で動くキリスト教世界の対立と衝突にある。ピエールはメルヴィルの一貫した真実追求精神の姿態化であり、これに対して、牧師フォールスグレイヴは、ギリシア語で“II”を意味する“EI”という表題を付けられたパンフレットが提唱する「有徳の便宜主義」の典型的实例であり、ピエールのいとこグレンは「便宜主義」もしくはご都合主義の最悪の具現例である。『ピエール』の結論と“EI”の結論は相反するが、両者は、いわばコインの両面のような表裏一体の関係にある。作品の真中部に挿入されている“EI”は「有徳の便宜主義」を「実行可能な美德」として支持するが、その一方で、ピエールは「便宜主義」なるものを「この地上の逃げ隠れする道德のご都合主義的な嘘や義務逃れ」と糾弾して、物語の初めから否定しており、最終的には、「便宜主義」の悪辣な具現例でありメルヴィルの世俗の分身であるグレンを象徴的に射殺した後、純真な魂の死を意味する象徴的自殺を遂げる。